山登如

2020年度
付中通信第５号
コロナ禍の教育その２

2020.6.1　　高水高等学校付属中学校長　宮本　剛

「楽しい」はどこから来る？

なにもマスクがすべて悪いというわけではない。３密回避の市民生活の知恵によって、私たちは面と向かって互いに互いの顔を見ながら話ができなくなったことが何よりもいけないのだ。「楽しい」は人と人とのふれあいや交感の中で初めて発生する感情だと私は改めて気づかされた。

ユネスコスクールの活動（高校生討論会）も停滞中

朋有り遠方より来る、亦た楽しからずや。

こうなると、『楽学』に託された先人の思いもなおさらよくわかる。学ぶことが楽しいのは、仲間と一緒に学び合えるからだ。とは、本当にその通りだ。

「オンライン授業」の工夫

コロナ禍で休校中、付中はオンライン授業にも意欲的に挑戦してきた。もちろん、学校のＩＣＴの設備状況や生徒の家庭環境によって足並みがそろわない局面が数多く発生したことは百も承知している。それでも与えられた条件の下、教科担当者は各々持ちうる限りのスキルを駆使して、生徒の学習支援に力を尽くしたと思う。

一方、クラス担任も連絡が思うように取れなくなった生徒宅によく出かけて行った。さぞかし敷居が高かったことだろう。会えない事情もわかっていながら、それでも訪問をせずにはいられなかった。

『子弟親愛』も本校の専売特許だ。生徒に愛される教師は、間違いなく人並み以上に生徒を愛する教師だ。卒業生がよく引用するat homeな学校とはこのようにしてでき上がるものだろう。

透明マスク

先週から変則ながら授業を再開し、生徒が登校を始めた。この気分のよさはいったい何だろう。気分がいいだけではない、力が体にみなぎってくるこの心持をどう表現したものか。あ

わよくばこの調子で、あの「楽しい」感じを生徒とともに一刻も早く取り戻したいものだ。
学習の遅れはいつか取り戻せるが、「学び」の楽しさを生徒が忘れてしまうことが何より心配だ。透明なマスクができたらいいのにと、本気で願うコロナ禍の校長である。

「ＡＮＮＭＩ」(Asia/America New Music Institute)来校、交流会はおととしの６月に開催された。コロナ禍で今年来日すらできない。